

『吾妻鏡』の謎：清朝へ渡った明治の性科学

著者	唐 権
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日文研フォーラム，開催地：ハートピア京都，会期：2014年2月12日，主催者：国際日本文化研究センター
ページ	1-71
発行年	2014-09-26
その他の言語のタイトル	The Teachings of the Bedchamber in Imperial China on Popular Sexology Imported from Meiji Japan
シリーズ	日文研フォーラム；275
URL	http://doi.org/10.15055/00005624

● テーマ ●

ウ チ ジン
『吾妻鏡』の謎
——清朝へ渡った明治の性科学——

The Teachings of the Bedchamber in Imperial China
On Popular Sexology Imported from Meiji Japan



2014 年 2 月 12 日（水）

● 発表者 ●

唐 権
TANG Quan

華東師範大学 准教授
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Associate Professor, East China Normal University
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

発表者紹介

唐 権

TANG Quan

華東師範大学 准教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Associate Professor, East China Normal University

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略歴

2002 年 3 月	総合研究大学院大学 博士
2009 年 7 月	華東師範大学 准教授
2013 年 9 月	国際日本文化研究センター 外国人研究員

著書・論文等

『海を越えた艶ごと——日中文化交流秘史』、新曜社、2005 年

「倭語之戯——曹寅『日本灯詞』研究」『清華大学学報』第 28 卷 126 期、哲学社会科学版、北京、2013 年

「絵入り都市案内書の誕生——清末上海の出版文化と日本」、白幡洋三郎・錦仁・原田信男編『都市文化博覧』、笠間書院、2011 年

「幼童の輩に臥遊の喜びを——比較の観点から見る名所図解」、白幡洋三郎編『旅と日本発見——移動と交通の文化形成力』、国際日本文化研究センター、2009 年

「日本婦人は不淫不妬？——中華文人の日本風俗観察小史」、井上章一編『性欲の文化史』、講談社、2008 年

『ウチジン吾妻鏡』の謎

——清朝へ渡った明治の性科学——

はじめに

私の専門分野は、清朝時代（二六四四～一九一〇）の中日文化交流史です。この二百数十年間はいわゆる西学東漸の時代で、近代西洋で生成されたさまざまな知識が日本と中国に次々に伝来したことは、よく知られています。ただ、個々のジャンルにおける知的交流の実態についてはすべて究明されたわけではありません。従来の研究で等閑に付されてきた領域の一つに、セクソロジーが挙げられると思います。西洋発の性知識が、どのような経緯で清末の中国知識人によって受容されたのか、という話をこれからしたいと思います。ご存じの方も多いと思いますが、近世以来の日中文化交流の中で、性の問題は常に大きく存在していました。二、三の例を挙げますと、たとえば開国以前の江戸時代において、数多くの中国人が長崎を訪れましたが、日本人女性のうち彼らの滞在している唐人屋敷に入ることが唯一許されたのは、丸山遊郭の遊女たちでした。唐人と遊女の喋々囁々は、両

国の交流が厳しく制限された当時においては壮観であり、それはまた近代以降の両国関係にも大きな影を落としました。幕末明治期あたりからは数多くの日本女性が海外へ飛び出して、その一部は上海へ渡り、「東洋茶館」という現地の日本茶屋お抱えの「東洋妓女」として、やがて租界の中で絶大な人気を博していきます。丸山遊女や東洋妓女といった日本女性と清代中国社会との関係をテーマとして、私は以前に『海を越えた艶ごと——日中文化交流秘史』（二〇〇五年）という本を書いたことがあります。それがきっかけで、セクシュアリティに絡む日中間のさまざまな問題に関心を持つようになりました。

数年前に井上章一教授が日文研で「性欲の文化史」と「性欲の社会史」の共同研究会を立ち上げた際、私もメンバーとして参加させていただきました。そこで日本の性科学史に詳しい何人かの研究者とも出会いました。この研究会は、東アジアの範囲内で人間の性欲に影響した社会的文化的要素を明らかにする、という趣旨のものでした。ちょうどその頃、私はたまたま清末の中国でセックスの手引書が数多く出版されていたという事実を知り、性に関わるさまざまな「知識」こそが、我々の性の在り方を左右してきた、生物的本能以外の最も重要な要素の一つではないか、と思うようになりました。そこで、中国人の手による最初のセックス手引書を手がかりとして、清末期の中国社会における性知識受容の実態を調べ始めたのです。

以下の話は、私の文献調査に基づいたものですが、百年前の中国人がどのような性知識を持ち、その知識がどこから来たのか、という内容のものです。奇しくも京都と深く関わった物語でもありますので、今回、京都で報告できることに何か不思議な縁を感じています。

一 『吾妻鏡』の謎

私の関心を清末期の性科学受容の歴史現場へ導いてくれたのは、先に述べた一冊の書物です。近年再発見されたこの書には、『吾妻鏡』という題名が付いています。書名の三文字を、清末の中国人読者はむろん、「あづまかがみ」ではなく、中国語の発音で「う・ち・じん」と読んでいたでしょう。

『吾妻鏡』といえば、誰もが鎌倉時代に編纂された歴史書を連想するかと思います。ところが、中国にも同名の書が存在します。これはいったいどういうことか。この事実を初めて知った時には本当に驚きました。

中国の『吾妻鏡』は光緒二十七年（一九〇一）に成立したもので、杭州図書公司という出版社によって出されています。薄っぺらい線綴じ本で、頁数はわずか十九丁しかありません。作者は楊彙、字は凌霄といい、今では無名の人物です。私の知る限りでは、杭州に

ある浙江省図書館の古籍部に一部が所蔵されているくらいで、ちょっとした稀覯本になっています。

日本の『吾妻鏡』は名著ですけれども、それに比べて、同名の中国書は有名どころか、刊行されてすぐ世間から忘れ去られました。その存在が一部の研究者に注目されるようになったのは、実は近年のことです。最初の紹介者は浙江工商大学の王宝平氏（二〇〇二年）で、その後復旦大学の張仲民氏が同書についての論攷を発表しています（二〇〇七年）。私は、両氏の研究を通して『吾妻鏡』の存在を知り、閲覧のために二度ほど浙江省図書館に足を運びました。図1は、調査の時に撮影した同書の写真です。

さて、日本の歴史書から題名を借りた『吾妻鏡』の内容はと言うと、日本史とは全く関係がありません。セックスの手引書の類です。この時代、「性」(sex)という概念がまだ中国語に導入されていなかったので、作者の楊は夫婦の性行為を「培種」という言葉で表現しています。そして、彼は自分の主張を「培種の道」とも言っています。

図2は同書中唯一の挿絵で、精子と卵子についての説明です。

「培種の道」の中身を一読した私の感想は、百年前に書かれた性についての言説と、今日の常識との間にかくも大きな懸隔があるのか、というものでした。たとえば、『吾妻鏡』の第二章は、「男女相愛すなわち磁石の理を論ず」（「論男女相愛即磁石之理」と題され、

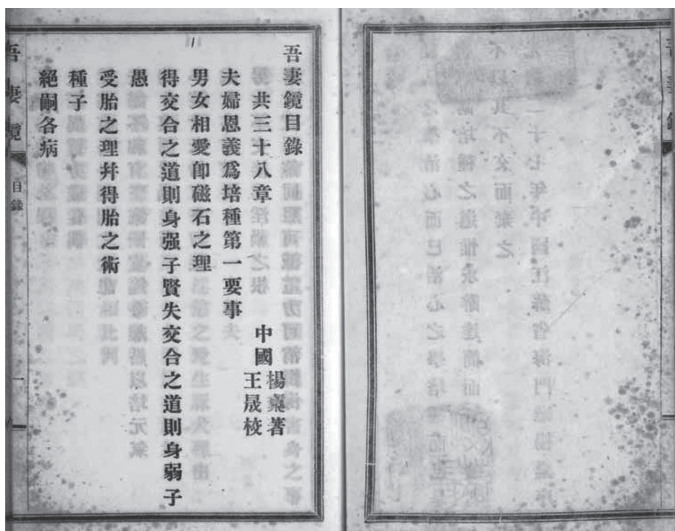


図1 楊蕤『吾妻鏡』（杭州図書公司、光緒27年序）の目録頁

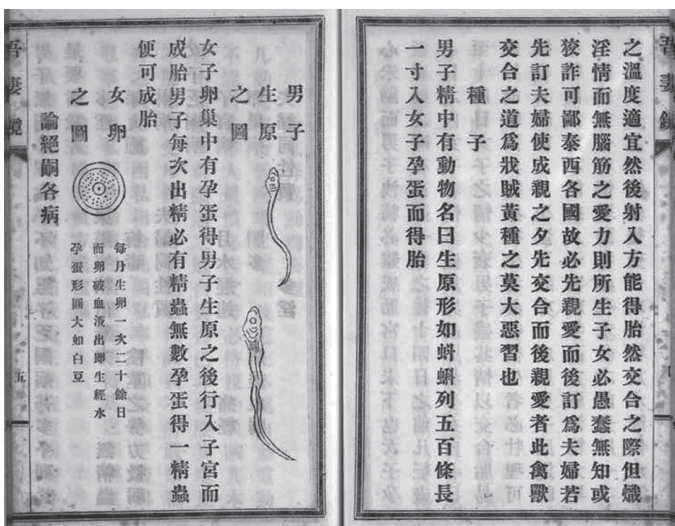


図2 『吾妻鏡』の挿絵

電気という物理学の概念をもつてセックスの原理を説明する、という内容です。そこでは次のような結論が下されています。「電気学の理論を知らない者は、男女相愛の原因を深く理解できまい」と。

あるいは第五章の「種子」でも、奇抜な解剖学的知識が披露されています。「男子の精液の中に動物があり、名前は生原という。その形は蝌蚪（おたまじゃくし）の如く、五百匹がならんでいて、一寸の長さがある。女子の『孕蛋』（たまご）に入れば、女子は懐妊する」（男子精中有動物、名曰生原、形如蝌蚪、列五百条、長一寸、入女子孕蛋而得胎）。これは図2の挿絵に出てくる精子の図に対する作者の解説です。

『吾妻鏡』の内容はすこぶる雑多なもので、後で詳しく説明しますが、電気理論については正直、私はこの書を読むまで全く知りませんでした。作者の楊は、いったいどの誰に就いて性知識を学んだのでしょうか。この疑問は、清末期に流布した性科学に関する私の研究の出発点となりました。

張仲民氏の研究で明らかになったように、中国では二十世紀初頭の時点で、生殖と衛生に関する本が数多く出回り、一大ブームの様相を呈しています。それら刊行物の大半が翻訳書で、中国人の手による作品はそれほど多くありませんでした。その意味で、『吾妻鏡』は中国人による性科学受容の一面を如実に記した記録として、たいへん重要な文献と言える

ましよう。この書が内包している問題点として、主として次の三点が挙げられると私は考えています。

まずは性科学が中国に伝わった経緯。つまりどのような知識がいつ、どういう経路で中国に伝来したのか、という問題。『吾妻鏡』という題名から想像できるように、性科学をめぐる知的交流は、日本と深く関わったものです。私は、主として書籍交流という観点から、清末中国に流布した日本関係の性科学通俗書を調査しました。

これに関連して、第二の問題点は近代教育の展開に関わるものです。明治日本より近代文明を摂取するにあたり、一般的に、中国人留学生が最も重要な役割を果たしたといわれています。ところが、中国人による日本留学は一八九六年から始まっているものの、一九〇一年の時点では彼らの活躍はまだ始まっていません。もし『吾妻鏡』が日本の影響下で作られた書物であるとすれば、中国国内に住んでいる一人の読書人がどのようにして日本語を学び、また、物理学・医学関連の基礎知識をどのように身に付けたのか。『吾妻鏡』の成立過程を解明するために、私は二十世紀初頭の杭州辺りの教育事情について調べてみました。

それから、三番目の問題は書名の意味についてです。日本の歴史書である『吾妻鏡』が最初に中国にもたらされたのは、十七世紀半ば頃のことでした。以来、書名の三文字は外

来語として次第に中国語の中に定着していきますが、その間、日本語にないニュアンスも付与されるようになりました。私の三番目の作業は、清人の詩文に見られる「吾妻鏡」の使用例を拾い集めて、この言葉に対する彼らのイメージを浮き彫りにしてみようとするものです。

以下、この三つの問題に即して、話を進めていきたいと思います。

二 開化セクソロジーについて

清末期から民国期にかけて、中国が日本から近代的学知を如何に多く取り入れたかということについては、千ページを超えるかの膨大な『中国訳日本書総合目録』（香港中文大學出版社、一九八〇年）を見れば分かります。残念なことに、セクソロジーというジャンルの書物はこの目録の中にあまり多く収録されていません。後で詳説しますが、二十世紀初頭の日中文化交流において、性知識の導入はその時代の大きな課題で、関連の出版物も多く存在しました。したがって、清末期の人々の性知識の迷宮に深入りする前に、まず明治期の日本人の性知識について把握しなければなりません。後者は一般に「開化セクソロジー」と呼ばれていますが、果たしてどのような性格のものだったのか、まずこのことか

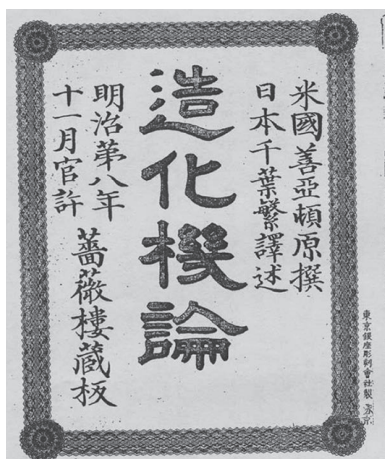


図3 善亜頓（ジェームス・アストン）原撰・千葉繁訳述『造化機論』（1875年刊）の表紙と口絵

ら見てみましょう。

開化セクソロジーは、『吾妻鏡』が出版されるより二十数年も早く、日本人が欧米から導入したもので、明治期の日本社会で一世を風靡したものでありました。その夜明けを告げる作品として、『造化機論』という書物があります。それはちょうど『解體新書』が刊行されてから百年という節目の明治八年（一八七五）に、千葉繁という人が善亜頓（ジェームス・アストン）の『自然の書』（*The Book of Nature*）を訳述したものです（図3）。

造化機というのは生殖器のことです。同書の通俗版である『通俗造化機論』（明治九年刊）の中で千葉は、「造化かみさまの靈妙きめうなるしかけ機工」という言い方で人間の生殖器を表現

しています。人間の生殖器は造化主の傑作に他ならない、という古典解剖学的な発想に基づいたものですが、言うまでもなくキリスト教色の濃い命名でもあります。

『造化機論』は刊行後、日本社会でたちまち人気を博し、セクソロジー旋風を巻き起こします。その後も同類の刊行物が次々に出て、最終的には、三百点以上の類書が作られました（石川一孝『明治造化機論年表』）。それら類書の中には、題名に「造化」の二文字が付いているものが多く見られます。それゆえ明治期に、このジャンルが一括して「造化機論」と呼ばれたこともありました。

明治期の造化機論に関しては、すでにいくつかの優れた研究があります。木本至氏をはじめ、上野千鶴子氏、赤川学氏、斉藤光氏も大きな研究業績を残しています。諸氏の研究成果を参考にして、明治の造化機論の特色を次のように要約できるのではないかと思います。

一つは内容の雑多さです。上野氏をして、「妊娠のメカニズムから生殖テクノロジー、手淫過淫の害、性病の予防と治療、結婚や性道徳に至るまで、全く雑然たる玉石混淆ぶり」と言わしめたほどです。赤川学氏は『セクシュアリティの歴史社会学』において、造化機論の内容をさらに十二項目に分けて、詳しく紹介しています。

二つ目に、内容の雑多さと相まって、造化機論の文体と体裁も多様です。中には堅い漢

文とカタカナで翻訳したのもあれば、それに基づいた翻案ものもあり、さらに江戸時代の性文化の遺風が色濃く残っている戯作調のものもあります。言葉遣いも豊かで、「性」概念がまだ定着していないだけに、「色」「淫」「春情」など豊かな表現が飛び交います。ついでに言うと、造化機論の題名には明治中期までは「造化」という言葉が多く使われていましたが、それ以降になると次第に、「生殖」や「衛生」などが主流となった観があります。

それから三つ目の特色は、その挿絵にあります。造化機論の多くに、江戸時代の大開絵を彷彿とさせる挿絵が掲載されています。明治時代の読者はそれを「玉門画」と呼んでいたかもしれません。一頁大のサイズに銅版画の細かい線で描写したもので、中には色が付いているものもあります。この色刷りされた細密な性器と解剖図は、「繊細で細微だと言われる春画にはない、途方もないグロテスクさをもつて迫ってくる力がある」と川村邦光氏が指摘するように、明治の人々に大きなインパクトを与えました。

四つ目として、微細極まる挿絵とともに、造化機論における生殖器の解剖学的知識の紹介もたいへん詳細で、顕微鏡レベルのものといっても過言ではありません。しかもその内容はおおむね正確なもので、今日でも通用すると思われます。もっとも、生殖テクノロジーの知識に関しては、怪しいものが入っています。上野氏が「非科学的な項目や根拠

キリスト教色の濃いもので、「一夫一婦と夫婦和合イデオロギー」と、上野氏に名づけられています。内容はというと、女性性欲の肯定、「性Ⅱ愛Ⅱ結婚」の三位一体、「精神の愛」と「肉体の愛」の一致を唱えるものがほとんどで、いわゆるアメリカン・ピュリタンのなロマンチック・ラブ・イデオロギーが登場しています。このイデオロギーは、舶来の新しい観念として明治期の日本人に広く受け入れられたようです。当時の日本人による著作の中にも、「人生最大の快楽は一夫一婦の中に存す」のような主張が見られます。もともと、明治後期になると、この夫婦和合のイデオロギーにも変化が生じてきます。セックスが「男



図4 細野順纂訳『男女交合造化機新論』（1888年刊）表紙

のない俗信」として位置づけている通り、「男女兒自在懷妊法」、「忠孝ノ男子を造ル伝」などがその例です。

そして造化機論の五番目の特色として挙げられるのは、性知識の紹介に加え、性道德・性哲学についての言説が多く載っているということです。その内容はすこぶる

女の義務」という位置づけから、いつの間にか「国家への義務」へとすり替えられて、国粹主義の波に呑み込まれてしまふのです。

前述の道徳的な説教があたかも科学的根拠のあるものとして提示されたところに、造化機論の特色があります。その科学的根拠というのが、すなわち、木本至氏がかつて名づけた「性感電気説」です。その内容は少しややこしく、細かく分類すると、三種の電気説と二種の電気説に分けられます。ここでは参考のため、『男女交合造化機新論』（明治二十一年刊、図4）の中で著者の細野順が解説した三種電気説を例として引用してみます。

凡て電氣に三種あり、人身電氣、化学電氣、摩擦電氣これなり。天地間の動物これを具へざるものなしといへども、殊に多きは人類なり。而かして之れを具ふる人々其量を異にす。

人身電氣は即ち肉身電氣にして、凡そ血温を具ふる所の動物、皆之れを有せざるはなく、而かも人身に於て其尤も多量なるを見る。然りと雖へども其量人々相同じからざるを以て、之れを有すること較多き者を積極と呼び、稍少なき者を消極と称し、以て二等に區別す。男女に論なく此電氣は全身に治しと雖ども、殊に其陰部に発すること甚だ多く、且交合の際に當りて、其全身に存する所のものをして、幾ど全く陰部に

湊合せしめ、以て男女に快味くわいみを感じしむるものなりとす。然り而かして、男女の人身電氣其積極消極の差異最も甚だしきは、交合かうがふの快味くわいみを感じること殊に深く、其差異甚だ少きものは、快味くわいみを感じることまた浅しとす。是他なし、其差異甚だしきものは、男女の引力亦大なるも、其幾んど甲乙なき者に至ては、引力亦幾ど烏有に属するを以てなり。

化学電氣とは酸性物と塩基性物との混合に由て発する所の電氣にして、彼の「ガラハニ」滅金の如きはこれに依るものなり。蓋し婦人の陰部に於けるや、多量の塩基性流動物を貯へ、又其全面より酸性流動物を発す。而かして男子の陰具も亦多少の酸性流動物を発するが故に、交合の際此二物混合して、互ひに相抵抗し、乃ち電氣を發して其快味を助く。

摩擦電氣は何れの部を問はず、全身に洽きものなること、余輩の普ねく知る所なるが、其最も多きの部を、男子に在つては陰茎の龜頭とし、婦人に於ては陰部の挺孔即ち陰核なりとす。少壯男女の独自から此部を摩擦し、以て手淫と称する悪事を行ひ、一時の快美を貪るは、畢竟此摩擦電氣の發作を促がすに過ぎず。以上の理を熟解するときは、手淫並びに股間淫等の如きは其大害を為すを知るべきなり。

三種の電気説を簡単に説明しますと、男女が交わる時に、三種類の電気、すなわち、人身電気、舍密（化学）電気、摩擦電気が発生します。この三種類の電気が同時発生することによって、我々人間は初めて完全なる性的「快味」を深く味わうことができます。ただ、この最大限の喜びを味わせてくれる性行為というのは、夫婦の交わりに限り、それ以外の行為、たとえばオナニーや素股などをやる時は摩擦電気の一種類しか発生しません。故に一時的な「快美」があるとしても、体に「大害」があるとされます。

三種の電気説の他に、二種の電気説というものもよく登場します。こちらは性行為を、男の陽電と女の陰電とが調合する過程として捉えています。その論調もやはり三種の電気説と同様、男女電気の同時発動が伴わない性行為（買春やオナニーなど）を厳しく糾弾するものです。

要するに、三種の電気説と二種の電気説を含む性感電気説というのは、人間のさまざまな性行為に、一つのランクを付ける理論です。このランクの下で、夫婦間のセックスのみを格上げするとともに、その他（股間淫、売春）の価値を剥奪し、特にオナニーの害を執拗に説いています。上野氏はこの電気理論を、「一夫一婦と夫婦和合イデオロギーに、生物学的基礎を与えた」ものとして位置づけていますが、正鵠を射た指摘だと思えます。

性感電気説が日本に伝わったのは割と早く、それを初めて日本人に紹介したのが、『造

化機論二篇』(明治十一年刊)です。この書物は、エドワード・フートというアメリカ人医師の著作を、千葉繁が訳述したものです。ただし、この電気説が果たしてフートの発明であるかどうかは不明で、人間の著しく複雑な身体現象のすべてを物理学あるいは化学の原理によって説明しようという発想は、西洋医学史上の物理的医学派(イヤトロフュジカー)と化学的医学派(イヤトロケミカー)の考え方に通底するものがあると思います。今日の目で見れば、性感電気説は物理学的・化学的な装いを示しながら、その実、思弁的ではない学説なのです。そのため現代の『性科学大事典』などには、それに関する項目が一つも設けられていません。しかし、それとは別に、明治造化機論の世界では、この電気説が実によく紹介されており、日本社会にかつて広く流布したのは疑いのない事実です。赤川学氏は『セクシュアリティの歴史社会学』の中で、開化セクソロジーを支えるエピステーメーとして、この電気説を位置づけています。

ところで、前述のような特色を持つ造化機論は、同時代の日本人の目に、果たしてどのように映っていたのでしょうか。簡単に言うと、日本ではそれぞれ異なる三つの見方が存在していました。まず、官憲側の見方から紹介すると、明治政府は始めこそ放任の態度を見せていましたが、明治十三年三月に『造化玉手箱初篇』を発禁第一号に指定して以来、取締を徐々に拡大していきます。それ以降、木本至氏のいう「洋尊和卑主義」、つまり、

翻訳ものに甘く、和風の作品に厳しくという取締方針をとるようになり、大正二年になる
とついにすべての造化機論に対して、発禁処分が下されました。明治の官憲にとつ
て、造化機論は紛れもなく良風美俗を害する猥褻本でした。

一方、官憲の認識と対極にあったのが、書籍の出版販売に携わる側の認識でした。彼ら
にとつての造化機論の位置づけは、東京書籍商組合事務所より出版された『書籍総目録』
に明白に示されています。今日の図書全国総目録の前身でもあるこの目録は、明治二十六
年に初めて出版されたもので、造化機論関連の類書が数多く収録されています。その中で
造化機論がどのように分類されているかという点、すべて第一門の「医学」の下にある「生
理学」というジャンルに入っています。しかも造化機論の多くが学校用生理学の教科書の
すぐ隣にある「通俗」という項目に収録されており、次いで「衛生学」という項目にも数
点入っています。この事実は、造化機論を曲がりなりにも有用な医学書とする見方が存在
したことを物語っています。

さらにもう一つ、造化機論を読む立場の人々の見方もありました。ここで一例を挙げま
しょう。京都日々新聞社編『我楽多珍報』三十号（明治十三年）に、「読造化機論」という
小さな特集が組まれています。そこには六首の狂詩が掲載されており、その一つは次のよ
うな作品でした。

独握亀頭読機論　ひとり　きとうをにぎって　きろんをよむ

知得精虫作子孫　しるをえたり　せいちゅうの　しそんをつくるを

造化奇妙感心至　ぞうかのきみよう　かんしんのいたり

始識手淫弱心魂　はじめてしる　しゅいんの　しんこんをじゃくするを

宮津　図保良

一人の書生が、造化機論をポルノグラフィックに利用しようとしたところ、書中の性知識を読んでしまい、逆にオナニーの害を教えられた、という滑稽な情景を描いた作品です。この狂詩からも分かるように、明治期の日本人読者にとって、造化機論は春画淫本の一種であると同時に、れっきとした性科学啓蒙書でもあったのです。

以上見てきたように、造化機論は性の書物としてさまざまな体裁と内容を持つものであり、同時にそれに対する日本人の捉え方も、多様でした。それはやがて中国へ輸出されることになりますが、清末期を生きた中国人の捉え方はまた一味違うものでした。次にこの問題を見ていきたいと思います。

三 性知識の西学東漸小史——造化機論伝来以前

開化セクソロジーがどのように中国へ伝播したかを述べる前に、それ以前の様子について簡単に触れたいと思います。

生殖器の解剖学知識に関して言えば、実は造化機論が誕生するはるか以前、すでにキリスト教宣教師たちによって、「性学」(physica)の一部として中国に紹介されていました。イエズス会士の中には、西洋の解剖学を中国語(漢文)で紹介する人もいれば、また満州語に訳すという離れ業を見せる人もいました。西洋解剖学を中国人に紹介するために、宣教師たちは実に多大な努力をしたのです。

しかし、科学の力を借りて中国人の思考を変えようという彼らの期待は、みごとに裏切られることとなります。漢語や満州語に訳された解剖学書の影響力は、日本における『解体新書』のそれと比べて、全く大したものではありませんでした。なぜ西洋解剖学の知識が中国で広まらなかったのかについては、多くの理由が挙げられますが、一つの要因は政治権力の干渉にあります(たとえば満州語の『格体全録』が刊行されなかったことがその好例です)。もう一つ、この時代の解剖学が、まだ神学的な色彩を強く帯びていたことも挙げ

られましょう。宣教師たちが解剖学的知識を中国人に伝えたのは、造化主すなわち神の偉大さを理解させるためでした。そのため、キリスト教に反感を持つ正統な儒学者、たとえば、嘉靖年間の儒者である俞正燮などはこれに強く反発したのです。

それから、解剖学のうちの性知識に限って言う、さらに二つの理由が挙げられます。一つは言葉の問題です。宣教師たちは解剖学の知識を伝えるために、当時の中国語に存在しない多くの専門用語を新たに発明しなければなりません。男性の精液や女性の月経、および卵子を指す「質具」という語や、神経を意味する「筋」という語がその例ですが、当時の一般の人々にとつて、簡単に理解できるものではありませんでした。現に、俞正燮などは『人身図説』を読んで、西洋人は四つの睾丸を持っていると勘違いをしています（『葵巳存稿』）。

それに加え、宣教師たちの性に対する姿勢も、性知識の伝播を妨げるものでした。彼らは性に関わる問題に触れる際、非常に小心翼翼とした態度をとりました。造化機論に堂々と掲載されている「玉門画」のような生殖器解剖図は、彼らの著作には存在しません。たとえば、『格体全録』の挿絵を原図と比べると分かる通り、作者のパランナン（巴多明）は男性の身体構造を説明する時、わざわざ画中の男の腰部分に布のようなものを付け加えて、陰部を隠しています（図5）。むろん女性の身体図も同じです。図6は女性の子宮に

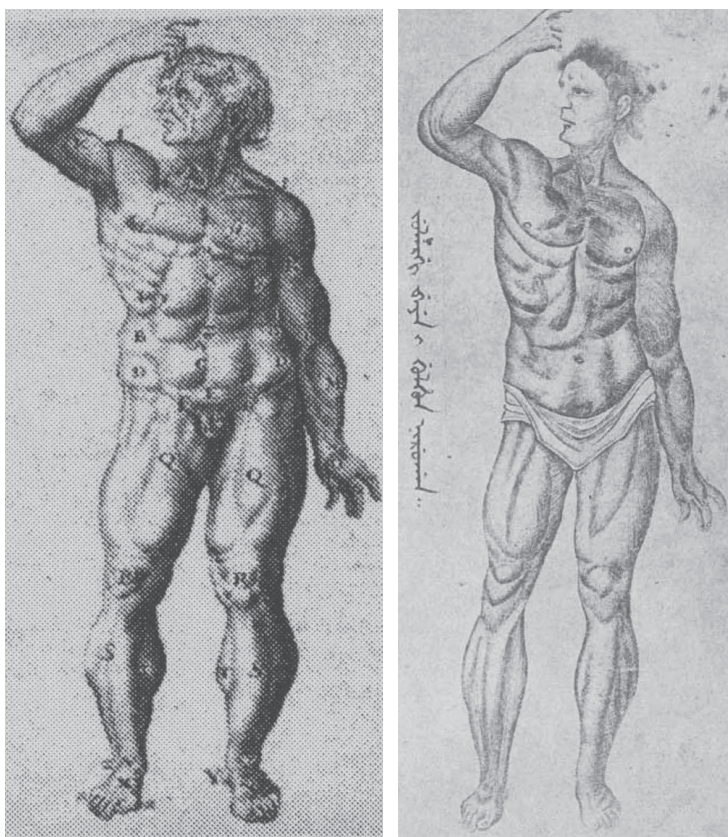


図5 パランナン（巴多明）著『格体全録』挿絵の第1図「正面所見人体全図」（右）とその原図（左、Bauhin『解剖学の劇場』所収、1605年、日文研野間文庫蔵）

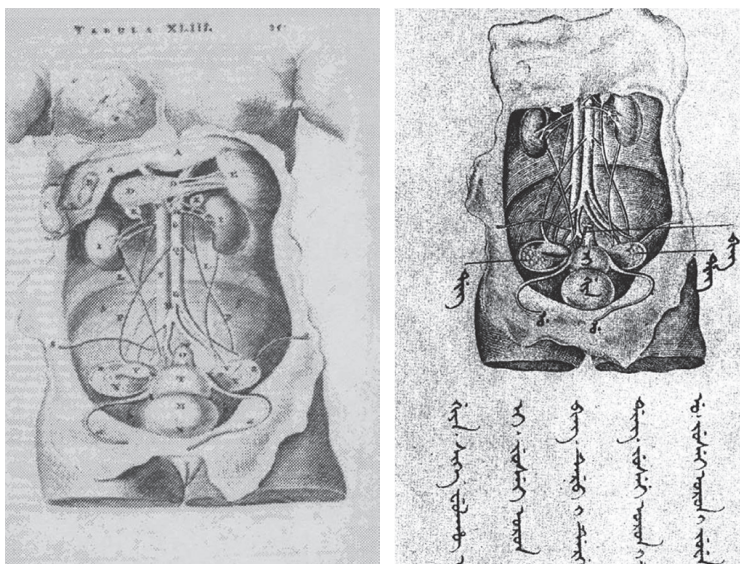


図6 『格体全録』挿絵の第79図(右)とその原図(左、Thomas Bartholin『人体解剖学』、1673年、日文研野間文庫蔵)

関する説明ですが、元絵と比べると、説明がかなり簡略化されているだけでなく、女性的な部分がすべて見えないように工夫されています。ついでに言うと、パランナンは挿絵だけでなく、言葉遣いにも気を配っていました。陰茎の訳語として彼は、「生命力」を意味する満州語の *ergen* という婉曲表現を使っています。とにかく、西洋解剖学における性知識は、清朝の初期にはすでに伝わっていたものの、中国社会に与えた影響はたいへん限定的で、微々たるものでした。

この状況は、アヘン戦争以後もあまり変わりませんでした。十九世紀

半ば頃になると、新たにイギリス系の解剖学が中国に入ってきます。代表的なものとして、ホブソン（合信）というイギリス人の医師兼宣教師が書いた『全体新論』が挙げられます。これは、イエズス会士が著した医学書より多くの中国人読者を獲得したものの、中国社会の反応は鈍いままでした。特に性知識について、同時代の読書人たちはほとんど感想を残していません。

ただ、この『全体新論』に関して、一つ特筆すべきことがあります。本書は出版後、すぐに日本に輸出されました。しかも、わずか数年後の安政四年、同名の和刻版も作られています。さらに明治に入ると、二種類の『全体新論訳解』が、それぞれ東京と大阪で出版されました。ホブソンの学説に対する反響は、中国より日本のほうがずっと大きかったです。

『全体新論』は解剖学の書ですが、その中の「外腎論」「陽精論」「陰経論」の三節では、生殖器の解剖学的知識を紹介しています。それだけでなく、実は性道徳めいた内容も含まれています。たとえば、「陽精論」には、次のようなことが書かれています。

若シ手淫シテ自ラ精氣ヲ洩セハ、身ヲ傷フ更ニ甚ダシ、毎ニ青盲聾瞶ノ病症アリ、客ヲ擁ヘ抱クノ妓コ、人ヲ宿セルノ娼ナドニ、至リテハ花柳ノ害ハ尤モ酷タシ、身体ヲ

傷残ヒ、毒ハ其ノ妻孥ニ及ブ、自カラ愛スルヲ知ラザル者ナレバ、誰人カ為ニ之ヲ惜マンヤ。

オナニー有害論の言説が、造化機論にはよく見られます。しかし、このような言説は、千葉繁訳述の『造化機論』が刊行される以前、すでに日本語の書物に記載されていました。『全体新論』の人気ぶりから推測すると、ホブソンの説は、明治前期の日本社会でかなり知られていたのではないかと思えます。

その明白な証拠として、造化機論には実際に『全体新論』の影響が見られます。少なくとも用語のレベルでは、両者の連関が顕著に存在します。千葉繁は『造化機論』の中で、神を意味する「造化」という言葉や、睾丸を意味する「外腎」、女子の生殖器を意味する「陰経」などの解剖学用語を使っていますが、これらはすべてホブソンが使ったものです（『全体新論』には「造化論」という節さえ設けられています）。それから、オナニーを意味する「手淫」も、この『全体新論』によって、初めて日本語に定着したと思われる。と言うのも、『全体新論訳解』の翻訳者である高木熊三郎は、「手淫」という言葉を理解できていませんでした。彼は同書の注の中で、「手淫未ダ詳カナラズ疑ラクハ宣淫ノ誤リナラン」と憶測しています。

いずれにせよ、解剖学の漢訳西洋書は、中国では反応が鈍かったのに対して、日本では全面的かつ迅速に受け入れられました。その影響がさらに造化機論にも及んだのです。造化機論の源流を考える際、中国からの影響は無視できないと思われます。

四 造化機論の中国輸出

セクソロジーに対する中国人の認識が大きく変わったのは、日清戦争（一八九四～九五）以後のことです。ちっぽけな隣国に予想外の大敗を喫したという現実は、当時の知識人たちに大きな衝撃を与えました。それがきっかけで、十九世紀末期の数年間には列強による侵略がいつそう苛烈なものとなりました。そして当時の知識人の多くが、このままでは中国は種族の生存競争に負けてしまい、中国人種がいずれ絶滅するのではないかと深刻な危機感を抱くようになったのです。

亡国の危機から国を救うためには、中国社会を根本から変えなければならない。そう思う知識人たちが真っ先に注目した問題の一つに、中国人の身体があります。当時、身体改造の問題が大きく取り上げられ、社会改良の基礎として位置づけられていました（黄金麟『歴史・身体・国家——近代中国的身体形成（1895-1937）』）。このような身体認識が広く共有

されたことを背景として、「保種」（種を守れ）や「強種」（種を強くせよ）のようなスローガンも盛んに叫ばれました。当然ながら、身体に関連する西洋の学問もここで新たに要請されることになりますが、中でも脚光を浴びたのが、衛生学やセクソロジーでした。いずれも、健康で聡明な国民を作るのに必要不可欠な学問に違いない、と当時の人々は考えたようです。

この時代の代表的な論客として、譚嗣同と康有為がいました。二人は周知のように維新運動のリーダーでもあります。中でも康有為は、一八八〇年代から日本の書籍に注目しており、ちょうど戊戌の変法の最中、彼は『日本書目誌』（一八九八年）という本を編して光緒帝に献上しています。これは七千点以上の日本書を収録した目録ですが、先に挙げた日本の『書籍総目録』をネタ本としたものです。その出版目的は言うまでもなく、日本書を利用して西洋の学問を全面的に摂取することにあります。同書の中で、康が最も重視したジャンルの一つが、他ならぬ造化機論です。彼は、次のようにコメントしています。

右に、生理学通俗の書物を十一種挙げました。（中略）学問というものは、学ぶべきものと、学ばなくていいものがあります。たとえば生理学の場合、からだという身近なものを対象としており、誰もが持っているものです。我が国の『素問』という書が

その起源ですが、近時の西洋ではこの学問が大いに発達してきました。（中略）日本人はそれらの関連書をことごとく翻訳し、学校でも教え、通俗なものなら世間でも流行っています。生理学は造化の根源を追求するもので、男女のことまで説いてくれます。子づくりの器官から天命の精髓を求めるとの学問は、言ってみれば物理学の源であり、心霊学の本です。（中略）生理学の理に通じ、自分の命を守ることは、人道の根本であり、最初にやるべき学問と言えましょう。

『日本書目誌』卷一、生理門、生理学通俗

中国人がもし学問をやるなら、まず造化機論から始めなければならない。これが、当時の中国を代表する知識人であった康有為の見方でした。日本の官憲が造化機論を猥褻本として扱い、また、多くの日本人読者がそれをポルノグラフィ的に利用していることを、康はきつと知らなかったと思います。こうして、亡国の危機感に駆られた清末の知識人は、断片的な情報を頼りにして、藁にもすがらうような思いで開化セクソロジーにたどり着いたのです。

戊戌の変法は数カ月で弾圧され、その後、康有為も海外への逃亡を余儀なくされます。しかし、造化機論に対する彼の強力な勧めは、当時の中国社会で広く受け入れられたよう

です。なぜなら、日本から造化機論の類書を直接輸入するという動きが、『日本書目誌』刊行から数年後に現れたからです。図7は、一九〇一年六月二十一日付の『申報』に掲載されている日本書の販売広告で、広告主は理文軒中外書会という、上海市内に書肆を開いていた会社です。文字がびっしり詰まったこの広告を細かく見ると、その中身は次の通りです。『日清韓三国詳細地図』以下地図類計二十九点、『小学修身訓画』などの学校用掛図計二十幅、世界の皇帝像と日本歴代天皇像計六種、羅布存徳（ロブシャイト）著『華英字典』以下辞書類計二十八点、造化機論計九点、その他一点（『日本風俗』）。造化機論九点のうちには、次のような著作が入っています。

生植器新書 一元五角

普通妊娠論附小兒養育法 一元三角

通俗造化機論 六角

男女交合機論 五角

無上之快樂 四角

男女交合新論 五角

男女造化機論 七角

男女造化機新論 七角
男女交合秘訣 五角

この広告の中で、造化機論の刊行物が、小学修身用の掛図や語学の辞書、皇帝像・天皇像といった教育関連の印刷物と一緒に並べられていることは、注目に値します。これは、造化機論が清末の中国でれっきとした近代知識の啓蒙書として見なされていたことを物語っています。日本では考えられないことですが、小学校の教科書や天皇像の横に、造化機論の書物が置かれて堂々と販売されるという風景が、清末上海の書肆では見られたよう



図7 理文軒中外書会の日本
図書販売広告（『申報』1901
年6月21日付）

です。

では、日本から直輸入された造化機論の書物とは実際どのようなものだったのか、少し具体的に見てみましょう。前記リストの筆頭に挙げられた「生殖器新書」は、おそらく『生殖器新書 全 一名 既婚未婚男女必読婚姻案内』（米国医学博士 ホリック著・日本医学士 守矢親国訳、博文館、明治三十年）でしょう。これは生殖器に関する解剖学と病理学の知識を主な内容とする専門書で、清末の人々にとって注目度の高いものでした。その後、本書の中国語版が二つも出ています。先に出たのは、『生殖器新書』（霍立克著、仇光裕口訳・王建善筆述、日新書所刊、一九〇一年）というもので（図8）、訳者の一人である王建善によると、口訳者の仇光裕は西洋医学専門の医師で、二人で原書を英語から中国語に訳したといえます。しかし、同書と守矢訳の日本語版とを比べてみると、専門用語の面において両者は驚くほど一致しています。中国語の翻訳者は間違いなく日本語版を参考にしたのでしょう。この事実から、当時西洋医学の医者たちの間で、日本で成立した性・生殖関連の解剖学的用語が積極的に受け入れられた、ということが推察できます。

ちなみに、ホリックという人物の著作は清末にかなり人気が高かったようです。彼の『生殖器の研究』（伊沢徳訳、求光閣書店、明治三十九年）も中国語に訳されています。その中国語版（宣統元年刊）の冒頭には、「美国医学博士花立克原著、訳述者日本医士伊沢徳、復

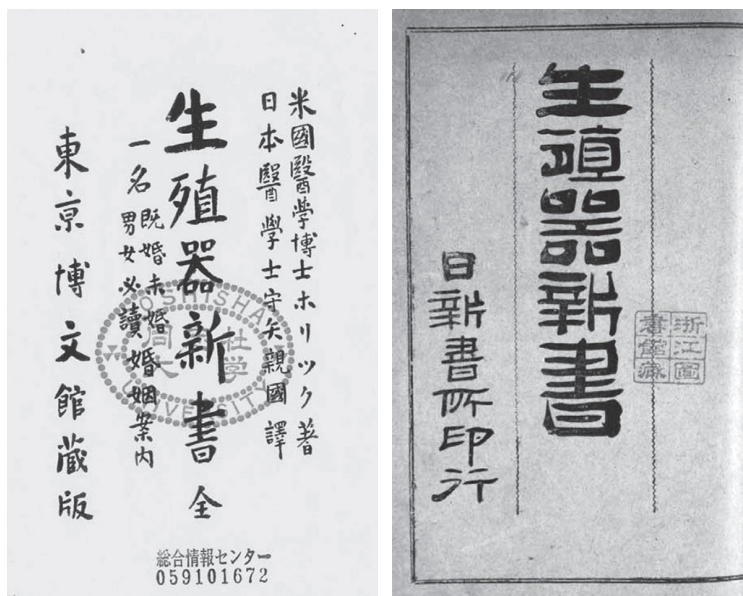


図8 『生殖器新書』の日本語版（左、守矢親国訳、1897年刊）と中国語版（右、仇光裕口訳・王建善筆述、1901年刊）

訳者雲間姚昶緒」とあり、中国語訳は日本語版に依拠していることが明記されています。

さらにもう一つ、ホリック著・春夢楼主人訳『学理実験色情衛生男女の秘密』（盛文堂書房、発行人福永捨次郎、明治四十一年刊、翌明治四十二年八月発禁）も中国語に翻訳されました。こちらは厚顔無恥な出版商人がホリックの名前を利用して作った贋作で、日本では出版後すぐに発禁となりました。ところが、このような書物にも中国語版（『学理実験色情衛生 男女之秘密』、光緒三十四年刊）があり、しかもそれが繰り返し再版された

ので、清末民初の中国社会にかなり広く流布していたと思われます。

前述の『申報』日本書販売広告の話に戻ります。九点の造化機論の中には、『生殖器新書』のように学術性を有する翻訳書がある一方、それと対極にある書物も入っています。その代表例として、『無上之快樂』が挙げられます(図9)。書名を正しく言えば、『男女交合無上之快樂』となりますが、大阪の梶尾商会なるところが明治三十一年(一八九八)に刊行し、明治四十五年と大正二年の二度にわたって発禁処分を受けたものです。著者は、「東都愛情散史校閲、浪速艷情笑史著」となっていて、はしがきを記したのは「快樂無上人」という人物でした。この人物によれば、同書は、「世の粹様野暮様偕は物堅き石部金吉又祇園豆腐のやわらかき方様」のために書かれたものだといえます。本文を覗いてみると、確かに造化機論流の知識があちらこちらに散りばめられており、「色の世界」「思案の外の色の道」「春心」などの章題から推察できる通り、戯作の流れを汲んだ書物です。この書はさすがに中国語に翻訳されませんでしたが、孫宝瑄という同時代の読書家(北洋政府の内閣総理を務めた孫宝琦の弟、その妻は李鴻章の姪)が、上海四馬路の理文軒中外書会で購入しています。精子と卵子を「山中の金銀と海底の珠玉」と喩える書中の文言に対して、孫は、「悟りの境地に達している」と激賞しています(『忘山廬日記』、光緒二十八年十月三十日)。



図9 東都愛情散史校閲、浪華艶情笑
史著『男女交合無上之快樂』（梶
尾商会、1898年）の表紙

理文軒中外書会が出した日本書の広告の中で、中国人に広く読まれた書としては他に、二点が挙げられます。その一つが『男女造化機新論』です。これはおそらく、『男女交合造化機新論』（細野順纂訳、村上真助発行、明治二十一年刊、明治四十四年七月発禁）という書であろうと思われます。実はこの書には『生殖器新書』と同様、二つの中国語版がありました。それぞれ『普通男女交合造化機新論』『造化機新論』と名づけられて、一九〇二〇〇三年に出版されています。『男女交合造化機新論』は典型的な造化機論の書物で、三種の電気説もオナニーの害も詳しく紹介しています。作者の細野順は、「帝国医科大学卒業」

という肩書きを持ち、また漢文の序を送った佐川晃という人物は、「海軍大軍医」と紹介されています。こういういかめしい肩書きは、作品の権威を高めるために付けられたものに違いありませんが、清末の中国読書人はどうもそれに弱かったようです。もう一つ注目すべき書は、『男女交合新論』です。こちらは、橋爪貫一が、

アメリカの「骨相学大博士」である発烏羅（ファウラー）の著書『クリエチフ アンド セキシユアル サイエンス』のうち、「生殖編」を抄訳した書で、日本では明治十二年初版、原題は『男女之義務』でした。明治二十年には、春陽堂という東京の書肆がそれを改題翻刻し、明治二十五年までに少なくとも八版を出しています。同書の中国語版としては、まず『戒淫養生男女種子交合新論』（美法烏羅・日本神田彦太郎著、一九〇一年）が出版され、間もなく『男女交合新論』（美法烏羅著、日本神田彦太郎・王立才編輯、憂亜子訳、日清書館、一九〇二年）と改題されて再版されています。後者は『増補東西学書録』（一九〇二年刊）という有名な目録にも収録されており、西学的重要著作として紹介されています。この二つの刊本の他に、武田雅哉氏によると、同書は『男女衛生交歓論』『男女愛情合歓新論』『絵図房中術』『男女交合秘要新論』『男女秘密種子奇方』『生育指南房中術』などの題でも出版されたといえます。いずれも海賊版であろうと思われるが、とにかく清末から民国期にかけて、これほど多くのバリエーションが出回った造化機論の書物は他に存在しません。内容を見ると、解剖学的な性知識の紹介は少なく、精神の愛を説く性哲学的な記述の多いことが、一つの大きな特徴です。同書が長く流行した理由は、あるいはここにあるかもしれません。

前述の『申報』広告には載っていませんが、一九〇一年以降に中国で紹介された造化機

論の書物として、藤根常吉纂訳『生殖衛生論』（吐鳳堂書店、明治三十二年）と、松本安子著『男女生殖健全法』（中央看護婦会、明治三十三年）の二冊があります。いずれも中国語に翻訳されており、それぞれ『婚姻進化新論』（藤根常吉撰、丁福同訳、一九〇三年）、『男女婚姻衛生学 一名 少年男女須知』（日本女医士 松本安子著、誘民子訳、啓智書会、一九〇二年）と題されています。日本での出版後わずかなタイムラグで早くも中国に紹介された造化機論として、注目すべきものです。

それから、やや特殊なケースとして、『男女衛生新論 一名 延寿得子法』（綿貫興三郎著、上海新智社、一九〇三年）があります。こちらは中国語版が先に出て、日本語版の『延寿得子 婦人と男子の衛生』（上海新智社東京分局、一九〇五年）が出たのはその二年ほど後になります。作者の綿貫興三郎は、「清国上海日本博愛医院副院長」という肩書きの持ち主、すなわち、清末の上海にいた日本人医師の一人だったのです。木本至氏がかつて同書を、「支那大陸に伸びた制圧者の手」と位置づけていますが、実際は中国の出版社が綿貫に執筆を依頼しており、どちらかという与中国側が積極的に導入したと言えます。

以上見てきたように、康有為著『日本書目誌』が出版されて間もなく、造化機論熱とも称すべきブームが、当時の中国社会に巻き起こっていました。日本の原書が輸入されると同時に、中国語に翻訳されたものも少なくありません。夥しい再版本と海賊版の存在か

ら見て、造化機論は清末期の人々の間でかなり広く読まれたと思います。その中には生理学の学術専門書から戯作的な文学作品まで幅広く含まれており、全く玉石混淆の様相を呈しています。深刻な危機感を抱いていた清末の読書人たちは、それらをいちいち区別せず、とにかく有用の知識として貪欲に摂取して社会改良の武器にしようとしたのです。

五 「培種の道」から見る造化機論の受容

楊龢の『吾妻鏡』は、まさにこの造化機論熱の中で誕生したものに他なりません。同書が書かれた一九〇一年にはすでに、霍立克『生殖器新書』、法烏羅『男女交合新論』、森田峻太郎『伝種改良問答』の三冊が中国で出版されています。これらに追隨する形で『吾妻鏡』は刊行され、時代の風潮をみごとに反映した作品として捉えられました。同書は中国人自身の手による著作であるだけに、開化セクソロジーが中国社会でどのように理解されたか、ということを知るにはまさに好個の資料です。以下、その中身を分析し、その特色を浮き彫りにした上で、造化機論が中国社会に及ぼした影響を見ていきたいと思います。

『吾妻鏡』の冒頭には、短い序文があります。作者の楊はまず次のように読者に呼びかけています。

人間を治める学問とは、要するに人間の心を治めることだ。人間の心を治める学問とは、要するに子づくりについて考究することだ。この書は専ら子づくりの道理を講ずるもので、意味のよく通ずるように私が腐心したあげく、その文章が簡略で下手なものになってしまった。読者の皆様、文が精彩に欠けるということでこの書を捨てないでいただきたい。光緒二十七年中国江蘇省海門庁楊藁序。

楊の出身地である「海門庁」とは、長江デルタ地域の北部にある地名で、現在の南通市です。文中にある「培種」という言葉は、おそらく彼自身による造語であろうと思われる。多少分かりにくい表現ですが、直訳すれば、「種族の培植」となるでしょう。子づくりのことを、清代の医学専門書（たとえば、『種子心法』や『秘本種子金丹』などの類）ではしばしば「種子」といい、「保種」、「強種」などのスローガンが盛んに叫ばれた当時の社会的背景を考えれば、すこぶる時代色の濃い表現であることが推察できましよう。その意味するところは、今日の「性」、「生殖」、「優生」などの概念を併せ持っていると思います。したがって「培種の道」という表現は、今日の「性科学」あるいは「優生学」に近い表現として捉えられと思います。

この序文の中で、楊堯が読者に最初に伝えたかったのは、「培種の道」なる学問の重要性です。諸学に冠たるものという位置づけですが、もちろん楊自身による独創的な発想ではありません。『日本書目誌』の中で康有為が記しているコメントの趣旨を、そのまま踏襲しているものです。セクソロジーに対して、清末の知識人たちが高い関心を寄せていたことが、この文章からも読み取れます。

さて、『吾妻鏡』の中身ですが、やはり他の造化機論と同様、たいへん雑多な内容によって構成されています。一つ言えるのは、本書で紹介されている知識の大半が、開化セクソロジーに由来するものである、ということです。全部で三十八章から成っていて、精神の愛を説く章（「論夫婦恩義為培種第一要事」）もあれば、手淫多淫の害に触れる章（「股淫、手淫、宿娼、強姦、夢遺、留精等同一害身之事」）もあります。男女駆落ちの原因を追究する章（「論私奔為動物公理」）もあれば、体液説に基づいて夫婦の相性を解釈する章（「論夫婦異質、方成佳偶」）もあります。書中の知識は、ファウラー『男女交合新論』、細野順『男女交合造化機新論』、ホリック『生殖器新書』、浪速艶情笑史『男女交合無上の快楽』の他、武藤忠夫『男女自衛造化機新論』および千葉繁『造化機論』などをも拠り所に行っているように、中でもファウラー『男女交合新論』の影響が顕著に見られます。

『吾妻鏡』のもう一つの特色としては、解剖学的知識に対する軽視が挙げられます。日

本で出版された造化機論のほとんどは、生殖器の形態とその働きについて正確かつ詳細に解説しています。それに比べて、『吾妻鏡』の紹介は非常に粗略なだけでなく、知識の正確さも欠如しています。具体的に言うとな、楊が紹介する生殖器の解剖学的知識はただ精子と卵子のこのみで、睾丸や子宮などその他の器官については全く言及していません。それだけでなく、生殖器の形態を示す挿絵すら一枚も掲載されていません。しかも彼の説明というのが、先にも紹介したように、たいへん奇抜なものです。「男子の精液の中に動物があり、名前は生原という。形は蝌蚪の如く、五百匹がならんでいて、一寸の長さがある。女子の『孕蛋』に入れば、女子は懷妊する」のような説明を見ると、楊の知識が如何にあやふやであるかが分かります。ただ、この説明を遡源していくと、やはり先に述べた諸書にぶつかるのです。『男女交合無上之快樂』は、精子を「無数の小動物」と表現しており、細野順『男女交合造化機新論』は、「精液は男子生殖の原素にして」云々と述べています。このくだりを理解できなかったせいか、楊鼯は、「生殖の原素」を精子の名称だと勘違いして、「生原」という新語を生み出したのです。それから、「五百匹」や「一寸」という数字ですが、おそらくホリック『生殖器新書』にある、「精虫は芥子粒大の場合に五万あり」の一文がその出所であろうと思われます。とにかく、解剖学や生理学の知識に関する楊の理解については、お世辞にもレベルの高いものとは言えません。

他方、解剖学知識に対する無理解と関心の低さとは対照的に、本書の中で大々的に紹介されている学説があります。すなわち性感電気説です。『吾妻鏡』中には、「電気」という言葉がなんと十九回も登場しており、その略である「電」の一字も九回使われています。また、関連用語として、「電浪」「電局」「電学」「電力」「電質」などが文章のあちらこちらにちりばめられています。さらに、セックスのことを「放電」と表現する箇所もあります。電気説に直接関係する用語として、「摩擦電」「酸鹼電」「化合電」の三語が記されていますが、言うまでもなく三種の電気説を指す言葉です。その他、「陰陽二電」の一語も出ているので、どうやら楊蕪は二種の電気説についても多少知っていたようです。

「電気学の理論を知らない者は、男女相愛の原因を深く理解できまい」と楊が述べているように、性感電気説は『吾妻鏡』の中で、性の基本原理と位置づけられています。実際、『吾妻鏡』の核心は、この電気説に基づいて性にまつわるさまざまな現象を説明する、というところにあります。その解釈範囲を見ると、夫婦の日常生活をはじめ、男女の駆落ち、夫婦の相性、多淫の害、男女の服飾、夫婦間以外の性行為（股淫、手淫、買春、強姦、夢遺、留精）の害、聡明者好色の理由、女性の「外交」（異性との交際）の正当性、股間淫の害、結婚年齢の選択などにまで及んでいます。『吾妻鏡』における性感電気説の解釈範囲は、日本の造化機論と比べて、明らかに拡大されています。

私は、この性感電気説こそ、近代中国の知識人たちに大きな影響を及ぼした性科学の学説だったと思います。と言うのは、一人楊蕤だけでなく、この学説に傾倒した知識人が他にもいたからです。たとえば近代中国を代表する知識人に、蔡元培という人がいました。彼は「夫婦公約」（一九〇〇年）という文章の中で、次のように述べています。

体を交えることが男と女に限られるのはなぜか？ 曰く、男子の欲は陽電であり、女子の欲は陰電だからである。電理が同じであればお互いに退けあい、異なれば互いに吸い付きあう。退け合えば体に大きな害があり、吸い付けあえば体に大きな益がある。吸い付けあう益は、これが極まれば子供が生まれ、家を保つことに及び、さらに国を保ち、種を保つことにも及ぶのである。

（武田雅哉訳）

蔡元培は、清末の頃科挙試験に合格して翰林になり、民国時代には政府の教育部長や北京大学の総長も務めたエリートです。右の引用文は、夫婦の倫理を説く大真面目な論説ですが、そこで二種の電気説が「科学的」な根拠とされていることは明白です。

もう一例を挙げましょう。近代中国の最も有名なセクソロジストと言えば、一九二〇年

代後半に活躍した北京大学の教授・張競生を挙げなければなりません。彼の代表的な論文に、「第三種水與卵珠及生機的電和優種的關係、一名、美的性欲」〔『新文化』第一卷第二期、一九二七年〕があります。「第三種水」とはバルトリン腺液、「卵珠」とは卵子のことで、「生機的電」とは、他ならぬ女の陰電と男の陽電のことを指しています。この論文の中で張は、持論の「第三種水」理論を紹介しながら、二種の電気説に基づいて、「電化的交媾法」を提唱しています。一九二〇年代後半の時点でも、性感電気説が依然として一部の知識人の間で科学知識として信奉されていたことを、この論文は端的に示しています。

ちなみに、張競生の学説は、当時の中国社会に大きな反響を巻き起こすと同時に、周作人や潘光旦など同時代の知識人からは、厳しい批判も受けています。「第三種水」説は生理学の常識に合わないとか、「丹田呼吸」説は道士の房中術であるなど、随分非難されました。張競生本人はそれによって北京大学辭職を余儀なくされ、人生の後半にはたいへん苦労しました。ただ、不思議なことに、彼の「生機的電」ならびに「電化的交媾法」に対して、科学的見地からの攻撃はありませんでした。張競生を馬鹿にした同時代の人々さえ、まだ性感電気説を否定しきれていなかったのではないかと私は想像します。

それでは、楊堯や蔡元培、張競生らを電気説に傾倒させた理由は、果たしてどこにあったのでしょうか。この問題は、「電気」というものに対する清末期の人々の理解と深く関わっ

ていると思います。西洋の電気理論を最初に中国語で一般向けに紹介したのは、かの『全体新論』の著者であるホブソン（合信）でした。『博物新編』という博物学の著書の中で、ホブソンはわざわざ「電気論」と題する一節を設けて、次のように説明しています。

大地ノ体ニ氣アリテ電トイフ、流形ノ内ニ雜リ賦ク、物トシテ有ラザルナク、時トシテ然ラザルナシ、生氣ト絶テ類ヲ同ヲセズ、聚リ動クトキハ電トナリ火トナル、静カニ隠ル、トキハ散シテ密ニ藏ル、其本原ノ質、内ニ陰陽ノ二性ヲ具フ（陰陽トハ牝牡雌雄ノ義ニアラズ）、造化中庸ノ道ヲ得テ、偏マズ倚ラズ過不足ナシ、器物ノ中ノ若キ、一ヲ孤陰トナシ、一ヲ独陽トナス、則チ陰ハ必ズ陽ニ合ヒ、陽ハ必ズ陰ニ合フ、務メテ必ズ彼此会合シ一氣ニ調和フ

（大森解谷訳『博物新編訳解』、一八七〇年）

電気の正体について、ヨーロッパでは昔から謎とされてきましたが、十八世紀になって電流の実験が行われるようになってからは、電気は連続的流体であろうと考えられるようになりました。電気とは、すなわち「大地の体」にある「気」であるというホブソンの見解は、基本的にこの学説に依拠したものです。注目すべきは、ホブソンの解釈の中には、

西洋科学の専門用語が一切使われておらず、すべて「氣」「造化」「中庸」「陰」「陽」といった中国哲学の概念によって「電気」の説明がなされていることです。十九世紀半ば頃の中国語には、電気の正体を正しく説明しうる専門用語がまだ一つも存在していません。中国伝統の学問しか知らない清朝の読書人たちに「電気」のことを理解してもらうには、中国固有の哲学概念を利用することが、ホブソンにとって、あるいはやむを得ないことであつたのかもしれない。しかし、そのおかげで、清末の知識人たちの多くは、電気のことをどうやら「氣」の概念の延長線上で理解してしまったようです。

そして、この「電気Ⅱ氣」という解釈が、性感電気説を受け入れる土台になったのではないかと思います。と言うのも、中国の伝統医学の中で、セックスのメカニズムは基本的に「氣」の働きで説明されてきたからです。たとえば葉天士という人物は、『秘本種子金丹』（二八九六年刊）の中で、次のような持論を展開しています。

交わるとき、男には三至が必要だ。一、陽物が立って動くのは肝氣が来たからだ。二、大きく熱くなるのは心氣が来たからだ。三、堅くなり、いつまでもしゃんとしているのは腎氣が来たからだ。三至になると女が喜ぶ。萎えて立たないのは肝氣が来ていないからだ。無理にしたら筋を傷める。精は澄んで冷たく、温かくなならない。堅さが持

続しないのは腎氣が来ていないからだ。無理をすると骨を傷める。精は出ない。出て
も少ない。子どもが欲しかったら、気持ちを静めて欲を抑え、肝・心・腎の氣を養う
ことだ。

(土屋英明訳)

中国思想における「氣」は変幻自在なもので、いのちとからだの源とされています。男
女の鼻息や吐息だけでなく、唾液や乳汁ないし精液までが、すべて「氣」の形態とされて
います。そして男女が和合する時、からだ中から「氣」が動き始めて、やがて性器へ集中
するとされ、その「氣」が滞りなく到達した状態を「至」（あるいは「到」といいます。
中国の伝統医学には、「氣」と「至」の概念の組み合わせでセックスの原理を解釈してき
た歴史があります。

性愛における「氣」の理論はたいへん古いものです。伝統的には、「男Ⅱ四至」、「女Ⅱ
八到」という説が古くから存在しましたが、引用文に示されている「男Ⅱ三至」、「女Ⅱ五
至」の説は清末の医者が説いたものです。事実、後者は当時の中国において、かなり信奉
されていたようです。現に、「淫学」の提唱者である譚嗣同は、西洋の化学や解剖学に優
れた点があることを認めつつも、「中国の医者の間には、男には三至があり、女には五至

がある、という格別精妙な説がある。誰もこれは知っておくがよい」と述べて、西洋科学に劣らない学説と位置づけています（譚嗣同『仁学』）。

そして、「氣」と「至」の概念に基づいた中国医学の房中理論と、日本経由で伝来した性感電氣説との間には、多くの共通性を見出すことができます。どちらも思弁的なもので、かつ一つの原理をもって人間の性のすべてを解釈しようとしています。「電氣」と「氣」を同一視する近代中国の知識人たちは、解剖学の性知識に対してあまり興味を示さなかった一方、性感電氣説については熱烈に受け入れたのです。その理由が、あるいはここにあるのではないでしょうか。

造化機論の伝来によって、性感電氣説が中国社会にかなり浸透したことは、以上に述べた通りです。造化機論による影響は、もちろんそれだけではありませんでした。以下、その他の影響について、簡単に触れてみましょう。

影響の一つは、生殖器に関する解剖学用語に見えます。「陰莖」や「処女膜」のように、中国語と日本語で同じ漢字表記を使う用語が少なくありません。しかし、造化機論熱が高まる以前には、漢字表記が同じでも、意味の異なる語がいくつか存在していました。その事例を二、三挙げましょう。

「卵子」という語は、昔からあった中国語です。明清時代の随筆や小説の中にもよく登

場しています。たとえば、明代の短編小説「呉越王再世索江山」（『西湖二集』）に、「あの宝石山のふもとにある岩の上に、大きな痕跡が刻まれている。あれは呉越王の『卵子』の痕跡だといわれている」とあります。ここで言う「卵子」とは、男のキンタマを意味する語です。「卵子」のこのような用法は、近代以前の中国においてはむしろ一般的でした。

それから、「睾丸」という語も古くから使われていました。明末の中国にやってきたイエズス会の宣教師たちが書いた『人身図説』という解剖医学書の中に、女の「睾丸」を論じる節が設けられています。ここで言う「睾丸」とは、「卵巣」を指す訳語です（範行準『明季西洋伝入之医学』）。

清末の頃、西洋の人体解剖学を中国に導入しようとして、プロテスタントの医療宣教師たちはいくつかの著作を書き残しました。ホブソンの『全体新論』はその初期のものですが、一八八〇年代になると、より本格的な学術書も刊行されました。その一つに、アメリカ人のオスグッド（柯為良）が著した『全体闡微』（一八八一年刊）があり、同書には一七三三語に及ぶ解剖学用語の対訳表が掲載されています。この表の中には「陰莖」という語もあり、clitorisの対訳語として挙げられています。ちなみに、penisの対訳語とされたのは、今や死語となった「陽莖」です。

このように、生殖器に関する用語は、清末までばらばらで、統一されることがありませ

んでした。そういう状況の中で、造化機論熱が出現したのです。そしてこのブームがきっかけとなって、日本語の用法が徐々に中国語へ浸透し始めました。その過程において、前記の「卵子」「陰莖」「辜丸」のような、日本語の意味と齟齬する元来の用法がいつの間にか捨てられて、最終的には中国人の言語生活から消えていったのです。

造化機論がもたらした二番目の影響は、伝統学問の領域に現れています。日本では、造化機論が一世を風靡し始めた頃に、貝原益軒『養生論』の系譜を引く伝統の養生書の一群が「先哲の金言」として出版されました（永坂玄一郎『養生小訓大意』、明治十六年）。これと似た国粹主義的な動きは、清末期の中国にも見られます。その先頭に立ったのが、葉德輝という学者でした。造化機論の流行を苦々しく見る彼は、中国の古典にも同様の学説があるかどうかを懸命に調べました。日本人の学者と交流したおかげで、彼は丹波康頼著『医心方』という平安時代の医学書に出会ったのです。そして、同書から、「素女經」や「玉房秘訣」など古代中国の房中書四種四卷を輯逸して、一九〇三年以降、『双梅景闇叢書』として次々に刊行していきます。「新刊素女經の序」の中で、葉德輝は、出版の動機について次のように述べています。

今遠西の衛生学を言う者は、皆な飲食男女の故に於いて、隱微を推究し、新書を詠出

す。如えは生殖器、男女交合新論、婚姻衛生学。無知の夫^ふは、詫^{おど}ろきて鴻宝と為す。殊に知らず、中国の聖帝神君^{ちすじ}の胃^いは、此の学は已に四千年以前に於いて講求せるを。

（深澤一幸訳）

右の引用文にある「生殖器、男女交合新論、婚姻衛生学」がそれぞれ、ホリック著『生殖器新書』、ファウラー著『男女交合新論』、松本安子著『男女婚姻衛生学 一名 少年男女須知』であることは確かでしょう。これらの書物は、西洋文明に憧れている新派の読者に愛読されただけでなく、保守的な旧派文人である葉にも、大きな刺激を与えました。その影響によって『双梅景闇叢書』が生まれ、現在、中国における房中術研究の濫觴として評価されています。

さらにもう一つ、学術以外の世界にも、造化機論による影響が見られます。清末から民国期にかけて、『生殖器新書』『生殖器之研究』『男女之秘密』の出版により、作者の霍立克^{ホリック}という名前は、当時の中国人読者の間ですっかり有名になりました。そこで、この名前にあやかっただけでなく、一稼ぎをしようとするインチキ業者が現れてくるわけです。『申報』の広告欄を覗いてみると、「美国生殖器科大家霍立克先生」の発明だと銘打って、男のいろいろな悩みを治してくれる医療機器の販売宣伝が民国期の上海で大々的に行われていまし

た。その宣伝は一九二八年十月に始まり、一九四二年九月までの十数年間、ずっと続いたのです。商品の名前は、始めは「真空療腎機」でしたが、途中から「腎病自療器」に変わり、最後は「真空水治器」となります。一例として、『申報』第二四六一四号（一九四二年九月二十九日付）に掲載されている「男子福音真空水治器秘密自療」という題の広告文を見てみましょう。

アメリカの霍立克医博士による驚きの発明です！ 物理療法によつて、小さいものを大きくし、弱いものを強くしてくれます。医者に診てもらふ必要がなく、薬を飲む必要ありません。治療の範囲は、夢精、早漏、腎虧、インポテンツ、先天短小、不妊、包茎に及んでいます。一台が五十元、それから詳しい説明書もあります。五角の郵送費さえ支払つてくだされば、すぐ郵送させていただきます。上海六馬路二三一号、百靈藥房、電話九三八〇四。

『生殖器新書』の中国語版が出てから、すでに四十年以上の歳月が流れた一九四二年の広告です。当時、ホリックの名声が中国社会の中で依然として保たれていたことを教えてください。ひよっとしたら、清末期に出版された性の手引書は、第二次世界大戦の最中も

読まれていたのかもしれませんが。そう考えると、造化機論が中国社会に及ぼした影響は、やはり深遠なものと評価しなければなりません。

ちなみに、右の広告文からは、民国期中国人の性知識の特色が一つ見てとれます。それは、中国医学と西洋医学の混合という現象です。引用文に出てくる「夢精」や「腎虧」などは、いずれも中国伝統医学上の病名です。「精」を無駄になくしてはいけないという発想が根づいた中国医学において、夢精は重い病氣と見なされていました。それから、「腎虧」という病ですが、かつて黄克武氏が指摘したように、こちらも中国の文化的風土が生み出した特殊な病名です（黄克武「従申報医薬広告看民初上海的医療文化與社会生活、1912-1926」。「腎」は「精」を蓄え、人間の性を能力を左右する臓器であり、西洋医学の kidney とは別物です。とすると、十九世紀のアメリカー人解剖学者は、中国医学理論に基づいて、「真空療腎機」や「腎病自療器」のような生殖関連の医療機器を発明したことになり、それは今日から見ればまことに可笑しい話ですけれども、あろうことかその広告宣伝は民国時代の大新聞に十年以上も堂々と掲載され続けました。結局、性の領域に限って言うと、西洋の近代知識は中国社会にある程度浸透したものの、在来の知識に完全に取って代わることはできなかったと指摘せざるを得ません。

六 作者の人物像と杭州の知的環境

以上、専ら造化機論関係のテキストを考察対象として、言説の内容および伝播の実態などを見てきました。ここからは少し視点を変えて、『吾妻鏡』の成立にまつわる外部環境について考察したいと思います。作者の楊蕤とはいったいどのような人物で、どのような環境の下で『吾妻鏡』を書いたのか、それを見てみたいと思います。中国における造化機論受容の社会的背景を知るには、明らかにしなければならない問題からです。

『吾妻鏡』が出版された直後、杭州図書公司是新聞広告を出して、「海門大思想家楊凌霄先生」が著した傑作として宣伝したのですが（『中外日報』、一九〇二年六月二十一日付）、この人物に関する情報は現在それほど多く残っていません。ただし、孫宝瑄と交遊のあったことが、『忘山廬日記』に記されており、楊は地方エリート層の一員であったと推測できます。孫の日記中に彼は何度か登場しますが、光緒辛丑年（一九〇一）二月二十四日に書かれた次の記述は注目に値します。

日文学堂へ楊凌霄に会いにいきました。凌霄が杭州で日本の言語と文字を学んでから

すでに二年が経ちました。『言海』という日本の辞書が、文字を調べるのにとっても便利で、早く購入して利用するようにと、凌霄はわたしに助言をしてくれました。

ちょうど『吾妻鏡』が出版される前の年に、楊蕤と孫宝瑄は杭州で会っていました。当時の楊は、同地にある「日文学堂」という学校に在籍し、すでに日本語を二年間学んでいるとあります。楊が日本語の原書を読めた理由は、ここにあるのです。

それからもう一つ、『吾妻鏡』に関連する同時代の雑誌記事を紹介しましょう。明治三十六年（一九〇三）四月発売の梁啓超編『新民叢報』（横浜発行の半月刊）二十九号に、「公人」なる人物の投稿が掲載されています。「與新民叢報記者書」という題名の文章ですが、その中で楊は次のように紹介されています。

その『吾妻鏡』を著したのは、実は二人の人物です。メインの作者は三十過ぎの者で、ふだんから好奇心が強く、ひねくれた見解の持ち主です。すでに固くなった彼の脳みそのせいでしょう。彼は日本語を学んでからすでに三年以上が経ち、そのレベルはというと、和文漢読法で日本語を理解しようとする連中よりずっと上手です。それに、物質に関する欧米の学問をあまねく渉猟して、身に付けたものはまだ一つもないけれ

ども、その実力は日本の高等学校レベルを下回らないはずで、彼は情熱的な人です。しかしその情熱にふさわしい見識を有していません。だから彼は往々にして道理に合わないことをやってしまい、度を過ぎた見解を見せてしまい、偏りすぎたことを言っています。残念なことに、彼が生まれたのは三十年前のことです。自身から、自身が才能が生かせる教育を受けていません。それからもう一人は彼の助手で、年齢はまだ十代ですが、頭がとて良くて……（後略）

『吾妻鏡』 目次の冒頭には、「中国 楊蕤著 王晟校」とありますので、王という校正者を入れれば作者は二人になるということです。事実、この投稿に先立って、同じ『新民叢報』二十五号（一九〇三年二月）に「青年之墮落」という題の投稿が掲載されました。こちらは造化機論を全面的に否定する立場の人物によって書かれた文章で、書き手も匿名になっており詳らかではありません。その文章では『吾妻鏡』を、「誨淫誨盜之書」と決めつけ、さらに楊蕤を破廉恥な「妖孽之人」と罵倒しています。

その二カ月後に掲載された「與新民叢報記者書」は、言ってみれば「青年之墮落」に対する反論で、おそらく楊の知人の誰かが書いた文章だろうと思います。「公人」というペンネームの作者が、楊蕤を弁護しようという意図を持っていたことは明らかです。と同時に

に、楊蕤が「僻見」（ひねくれた見解）の持ち主として、周囲からやや変人扱いされていたことも読み取れます。新派の知識人の中にも、造化機論を苦々しく見る人がいたということでしょう。他方、楊の学力に対して、「公人」は高い評価を与えています。三年をかけて習得した日本語の実力を本物とし、「日本高等学校」レベルの知識をも身に付けていると評価しています。

前記の二つの資料は、楊蕤という人物の一面を教えてくれるだけにとどまりません。中国人の手による最初の造化機論が、なぜ杭州の地で誕生したのか、という謎を解く手がかりも、その中に隠れています。ここで、楊蕤が在籍した「日文学堂」が新たに浮上してきますが、それはいつたい、どのような教育機関だったのでしょうか。

杭州日文学堂は、一八九九年一月二十日に杭州市内の忠清巷にて創設された、いわゆる「東文学堂」の一つです（劉建雲『中国人の日本語学習史 清末の東文学堂』。学堂のスポンサーは、京都を本拠地とする東本願寺（真宗大谷派）でした。東本願寺は、明治維新後に日本仏教の各宗よりはるかに早く、中国での布教活動に先鞭をつけた宗派で、明治九年（一八七六）にはすでに東本願寺上海別院を設立し、大陸進出を果たしています。中国における東本願寺の活動は、「四億の信徒を得て世界の大勢力」になることを目指したものであり、派遣僧侶による教育事業の展開も、布教活動の重要な一環として位置づけられま



図 10 杭州日文学堂の写真、堂長伊藤賢道は後ろ右から2人目（『東本願寺上海開胸六十年史』79頁より）。

した。高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』によると、日清戦争以後の数年間、中国側からの強い要請もあり、東本願寺は中国の華中と華南方面に多くの学校を創設しました。具体的に言うと、一八九九年には、杭州日文学堂をはじめ、金陵東文学堂と蘇州東文学堂が開設され、同じ年に杭州日文学堂の付属校として、「東亜学堂」と「付属開導学堂」の二校も開校しています。その後、福建省泉州彰化学堂（一九〇一年）、福建省漳州日華書院（一九〇二年）、蘇州有隣学堂（一九〇三年）などが次々に設立されています。二十世紀初頭の数年間は、間違いなく東本願寺の教育事業が最盛期を迎えた時期でした。

これらの学堂の中でも、杭州日文学堂は

中心的な存在でした。その堂長を務めたのは、帝国大学出身の文学士、伊藤賢道という人物で、「省内外遠近の蒙生をして普通学に向はしめ、日華洋三学を以て天下有用の人材を陶鑄育成する」という壮語を残したかなりの野心家です。伊藤の在任中に、杭州武備学堂と浙江省立大学とが相次いで設立され、彼は請われて双方で理化学を教授し、文学士伊藤の声価は高まったという逸話を残しています。

杭州日文学堂の教育事業については、次の点に注目すべきです。一つは、その教育内容、もう一つは学生の構成です。これについて、高西賢正は『東本願寺上海開教六十年史』の中で次のように述べています。

杭州忠清巷の日文学堂は、普通学を専らとして、月謝二元をとって学生を募集した。教程は日本の中学五年間を三年に縮めたものであった。これは時人の要求に応じたものであるが、後藤葆真師は所期の目的と異ったので、之を俱とせず、去って支那各地を遊歴して、翌年帰国したといふ。

日文学堂はかくて、開校最初から五十六七名の学生が来たが、当時の生徒の姓名も一部はこれを知ることができる（資料第十五号）。年齢は四十余のものもあり、十五六歳のものもあった。中には挙人の試験に及第したのもあったといふ。

杭州日文学堂が当時の中国社会でかなりの人気を博したことが、右の引用から読み取れます。人気の秘密は、日本語教育だけでなく、日本の中学校レベルに相当する「普通学」が教えられたことでした。注目すべきは、学生の多くが成人で、すでに科挙試験を突破した地方エリートも含まれていた、ということudur。楊轟は、まさにそのうちの一人であったに違いありません。ちなみに、『東本願寺上海開教六十年史』の資料十五号には、設立当初の半年間に入学した二期の学生、計四十五名の名前が記されています。惜しいことに楊轟の名前はこのリストに入っていません。彼はおそらく第三期以降の学生だったのではないかと思われます。

杭州日文学堂の教程については、東本願寺の「清国開教本部事務章程」から窺うことができます。それによると、「第三年級」のカリキュラムには、日本語の授業の他に、「東洋史」や「代数」、「幾何」などもあり、さらに「生理」、「衛生」、「動物」などの科目も設けられています。この教程と並行して、明治三十三年には堂長の伊藤賢道が杭州日文学堂に医療所を併設したり、さらに日本から女医を迎えたりするなど、医療関連の活動も熱心に行われていました。これらの事業は結局長続きしませんでした。が、当時かなりの話題にはなっただようです。

そんな中、楊龢は学生として杭州日文学堂に三年間在籍していました。彼はここで日本語を習得し、また生理学や衛生学など「普通学」の諸科目も学んだわけですから、セクソロジ―啓蒙書の執筆に必要な知識も、すべて日文学堂で身に付けたものでしょう。この点からすると、『吾妻鏡』は東本願寺による近代教育事業がもたらした一つの結晶と言えるかもしれません。

七 「吾妻鏡」小考

いよいよ最後の謎に迫る時がやってきました。清末の中国で出版されたセクソロジ―の啓蒙書に、日本の歴史書のタイトルがそのまま借用されたのは、いったいなぜでしょうか。この謎を解くには、『吾妻鏡』が外来語として清代社会の中でどのように流布していたか、ということを見なければなりません。

日本の歴史書である『吾妻鏡』が中国に輸出されたのは、十七世紀半ばのことでした。清初の著名な学者、朱彝尊は、同書の日本刊本（寛永三年刊）を架蔵していた一人で、「吾妻鏡跋」という文章を残しています。この文章は、朱の読後感や書物の入手経緯などを記したもので、江南の文人の間では広く読まれたと思われる。朱の影響で、その後数種類

の写本が作られただけでなく、同書の日本刊本が清朝中期以降も江南に輸入され続け、呉興などの本屋で販売されていました（佐藤成裕『中陵漫録』）。この他にも、同書に関する清人の論評はいくつも存在し、さらに文学作品（たとえば尤侗の外国竹枝詞や曹寅の雜劇など）の中でも取り上げられています。一言でいうと、日本の『吾妻鏡』は清代の中国で「海外異書」の誉れを恣にした書物であったのです。

そして、『吾妻鏡』という書名の意味に関し、清朝の文人たちは興味津々でした。たとえば、尤侗は「外国竹枝詞」の中で、「吾妻」は島の名前である、とわざわざ注を付して説明しています。しかし、明代以降の日本地理書に、この地名は載っていません。そこで翁広平という清朝の学者は、朝鮮書の『東国通鑑』まで調べ、「吾妻鏡」の意味を突き止めようとなりました。むろん彼の努力は実りませんでした。

翁広平は近代以前の日本研究の頂点に立つ学者で、『吾妻鏡補』という日本地理書を残しています。彼は、「吾妻鏡」の意味にたいへんこだわっていました。いろいろと詮索しても要領を得なかったわけですが、ある時、自分の疑問はすっかり氷解したと言い出します。頼山陽の詩集『日本樂府』を目にした後のことでした。翁は「日本樂府序」（『聴鶯翫文鈔』）という文章の中で、「山陽の詩を読んで、初めて気持ちがすっきりしましたよ」（及見山陽樂府、始豁然矣）と、やや興奮気味に感想を述べています。

『日本樂府』は、頼山陽が生前唯一出版した漢詩集です。その中に、「吾妻鏡」と題する一首が含まれています。鎌倉幕府の史実を詠じたもので、内容は次の通りです。

吾妻鏡。

將為壽机將為乘。

小兒將軍數易姓。

一姓常執兵馬柄。

君不見。

阿姉買鏡阿妹夢。

鳩脚金函鳳得鳳。

妻夢長、吾夢短。

妻鏡明、吾鏡闇。

(大意)

吾妻鏡よ、

この悪事満載の史書！

小さな子どもを何度も幕府の將軍として迎え、

天下の兵権が常に一族によって握られる。

君は知っているだろう。

夢買いのために、姉が化粧の鏡を妹に渡したことを。

金の箱をくわえて飛んできた鳩を夢で見たのは妹なのに、

いい男と結婚したのは、美人の姉だった。

妻の夢はあんなに長続きしたのに、私の夢はつかの間だった。

妻の鏡はあんなに明るかったのに、私の鏡は曇ったままだった。

頼山陽は、鎌倉幕府の歴史を苦々しく見る儒学者でした。権力篡奪によって樹立した北条氏の政権に対して、彼は文学的な手法を駆使して痛烈な批判を下します。幕府の時事を記録した『吾妻鏡』は、まさに古代中国の史書である『檮杌』や『乗』のように、悪事だらけの歴史書ではないか、と彼は言います。その事例として、美人の「阿姉」、すなわち北条政子にまつわる夢買いの逸話や、不義密通から始まった政子と頼朝との結婚が、詩の中で大々的に取り上げられています。さらに、山陽の弟子である牧百峰が付した注釈では、政子の父・時政にも批判の矛先が向けられました。政子と頼朝の関係を奇貨とした時政が、

種々の権謀を弄し、「幕府の政權を執り、ついにその家を篡」つたと、百峰は解説しています。

頼山陽の漢詩「吾妻鏡」のもう一つの特色は、「鏡」という文字が四回も使われていることです。これについて、明治期の漢学者である坂井松梁は、「一個の鏡の字に就き、節々意を生じ、環旋窮りなき、猶連環体を読むが如し、婉麗、纖巧、題面に称える者と云うべし」と解釈しています（坂井松梁編『日本樂府詳解 詠史詩集』）。しかし、この詩を読んだ中国人の翁広平は、それを文学的手法とは捉えませんでした。翁はむしろ、「吾妻鏡」という言葉の由来が説かれる詠史の詩作として、この作品を理解したのです。いままで知らなかった「知識」を得た彼は、『日本樂府』を抄録した後の気持ちを、「晩年一大快事」とさへ述懐しています。

『日本樂府』は、頼山陽の存命中すでに中国に伝わっています。この詩集によって、彼の中国での文名は高まりました。『日本樂府』の影響は、一人翁広平だけでなく、他の清代文人にも及びました。と言うのも、頼山陽の作品と同様、「吾妻鏡」という言葉に強烈な性的含意を賦与した詩作が、他の清人作品にも見られるからです。次の一首は、まさにその典型例と言えます。

高屐豐鬢異樣鮮
風流不減漢唐年
生花妙遇江郎筆
能併三神山色伝
昔年曾訪吾妻鏡
彈指而今意未磨
何以斯凶頻展玩
源花韻事続新羅

（大意）

高い下駄とふつくらした髪型、なんとエキゾチック！
彼女の風情、まるでいにしえの人のよう。

さいわい絵の上手なあなたに出会い、

彼女の姿は、日本の風景とともに後世へ伝えるよ。

あなたはたしか、以前吾妻鏡を探訪したことがあったよね。
歳月が過ぎても、まだ意気消沈していないようだ。

なぜわたしがこの絵に惚れ込んだかというと、
そこには異国につながる風流があるからだ。

右の詩は、一八八六年十二月二日付『申報』の漢詩欄に掲載されたもので、粗亭という人物が投稿した「倚雲樓主所写小花小影」の中の一首です。詩の主題は、「東洋妓女」に対する中国文人の恋情を詠じたものですが、「東洋妓女」とは、清末上海の繁華街に現れた「東洋茶館」（日本茶屋）に抱えられている「からゆきさん」たちに対する呼称でした。彼女たちは異域からやってきた「解語の花」として、当時上海の文人たちの間でたいへんもてはやされていました。この詩の中には、「高屐豊鬢」、「風流」、「江郎」（文才ゆたかな色男の喩え）、「韻事」など、性的な含意を持つ言葉が多くちりばめられています。そして、「吾妻鏡」も、その仲間の一つに入っています。「昔年曾訪吾妻鏡 彈指而今意未磨」の一句には、主人公がかつて日本を訪れ、種々の風流韻事を残した、という含意があるように思われます。

ついでに言いますと、清人詩作の中で「吾妻鏡」は、日本の別称としてもしばしば使われました。『申報』に掲載された送別詩の中には、「異書早読吾妻鏡 行李紛投估客船」（異書の吾妻鏡を早く読み、いっぱいの荷物を抱えて客船に乗り込む。楊兆璽「曼老明経将之日本

贈詩留別即次原韻以當驪歌」、『申報』、一八八〇年三月二十六日付）という詩句が見られます。「異書早讀吾妻鏡」云々は、日本の歴史を学ぶという意味ではなく、「日本へ旅する」を意味します。さらにもう一例を挙げますと、一八九〇年代前後の『申報』には、日本ニュースの報道欄がありました。この報道欄にはいくつかの名称があつて一定しなかったのですが、そのうちのひとつが「吾妻鏡影」でした。「吾妻鏡」という言葉がここでは、日本の洒落た別称として使われていたのです。

いずれにせよ、清代中国に伝わった「吾妻鏡」という外来語は、元の日本語と比べて、ずいぶん意味が変わってしまいました。清人の詩文の中で、この三文字は、時に「海外異書」の比喩として、時に日本の洒落た別称として、時に男女の性愛を暗示する詩語として使われています。日本語を三年間学んだとはいえ、楊蕤もやはり当時の中国語のニュアンスに従って、この言葉を使ったのです。

おわりに

『吾妻鏡』を手がかりとして、清末の中国社会におけるセクソロジーの流布と影響を見てきました。結論として、次の三点を指摘したいと思います。

中国知識人によるセクソロロジーの受容について、これまでの研究は専ら中華民国期に焦点を絞ってきました。ストウプス『結婚愛』やエリス『性の心理』など、イギリス人学者の著作が広く読まれたことは、彭小妍氏の研究で明らかにされています。しかし、一つ前の時代である清末期も実は、すでに性の学説が盛んに説かれていた時代だったのです。「性」や「性欲」などの概念がまだ導入されていなかったこの時期、「強種」や「保種」などのスローガンの下、性感電気説をはじめ、造化機論に関連する諸々の言説が有用な「知識」として数多く紹介されました。しかも、それらの「知識」は短命に終わらず、かなり長く通用しており、民国期になってもその影響力は衰えませんでした。近代中国における性科学受容を考える際、日本による影響がささる大きかったことを、まずは指摘したいと思います。

それに関連して、清末の知識人たちが学習したセクソロロジーの中身がけっして純粋な科学的知識に根ざしていなかったことにも、注意すべきでしょう。十九世紀西洋のセクソロジー通俗書には、解剖学や生理学の知識紹介が見られる一方、性感電気のような、擬似科学に基づいた種々の俗説も氾濫しており、そのうえキリスト教的な性道徳の説教も混在していました。文明開化期の日本では、それが積極的に翻訳・紹介されますが、その結果、造化機論という大きな出版ジャンルが現れます。その造化機論の言説は、江戸時代の好色

文化や国粹主義的な思潮といった新しい要素も加味された、すこぶる日本色の濃いものでした。日清戦争後、造化機論の存在は中国知識人たちの目に留まることになりましたが、それに対する客観的な分析や批判などは一切なく、「物理学の源、心靈学の本」という主観的な思い込みで紹介され、間を置かずに類書が大流行するという社会現象にまで発展します。楊鼐が鼓吹する「培種の道」や、張競生の「電化的交媾法」などは、基本的に造化機論の延長線上にある言説として捉えられるものです。彼らの論述を読むと、セクソロジーに傾倒した清末民初の論客たちは、解剖生理学の正しい知識にはあまり目を向けず、専ら怪しげな学説に気を取られていたのではないかと気になってなりません。

清末期におけるセクソロジー受容のもう一つの特色は、学習の主体にあります。近代以降、中国が日本から多くを学んだことは、よく知られています。たいていの場合、知識伝播の主役は留学経験のある知識人たちでした。しかし、セクソロジーの導入は、いささか異なる様相を呈しています。つまり、日本語原書の輸入に始まり、国内の読書人がそれらの書を読み、翻訳し、さらに自らの手によって類書を創作する。この一連の動きを可能ならしめたのは、当時の中国国内における日本語教育と近代教育の急速な拡大でした。二十世紀前後の数年間、全国各地に東文学堂なる日本語教育機関が次々に設立されました。それにより、日本語著作の読める読者がにわかに増えたのです。東文学堂の創立と経営には

さまざまな人たちが携わっており、中でも真宗大谷派（東本願寺）は一つの重要な存在でした。教育事業は、東本願寺の中国布教の一環として一時華やかに展開され、その成果の一つに、杭州日文学堂の創設がありました。同学堂の学生であった楊龔はまさにそこで三年かけて日本語を習得し、同時に「普通学」の諸科目も学びました。『吾妻鏡』誕生の知的背景として、この学習経験は無視できないと思われます。東本願寺系の東文学堂が中国社会に及ぼした影響については、まだ究明されていない点も多いのですが、もっと正面から評価されるべきだと考えます。

中国におけるセクソロジーの受容は、西学東漸の歴史上、間違いなくたいへん重要な一頁です。それに関する研究はまだ始まったばかりですが、実態の解明に向けて、これから引き続き探求していきたいと思います。

参考文献

- 蔡毅『日本漢詩論稿』、中華書局、二〇〇七年
董少新『形神之間 早期西洋医学入華史稿』、上海古籍出版社、二〇一二年

範行準『明季西洋伝入之医学』、上海世紀出版集團、二〇一二年

黄克武「從申報医藥廣告看民初上海的医療文化與社會生活」、(台灣) 中央研究院近代史研究所編『中

央研究院近代史研究集刊』第十七下冊、一九八八年

黄金麟『歴史・身体・国家——近代中国の身体形成(1895-1937)』、新星出版社、二〇〇六年

彭小妍「五四的『新性道德』——女性情欲論述與建構民族国家」、中央研究院近代史研究所編『近代

中国婦女史研究』第三期、一九九五年

王宝平「中国における『吾妻鏡』の流布と伝播」、日本古文書協会編『古文書研究』五十五号、

二〇〇二年

——『吾妻鏡補 中国人による最初の日本通史』、朋友書店、一九九七年

——「康有為『日本書目志』出典考」、古典研究会編『汲古』五十七号、二〇一〇年

張仲民「另類的論述——楊蕤『吾妻鏡』簡介」、(台灣) 中央研究院近代史研究所編『近代中国婦女研

究』、第十五期、二〇〇七年

——『出版与文化政治——晚清的『衛生』書籍研究』、上海世紀出版集團、二〇〇九年

赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』、勁草書房、一九九九年

井上章一編『性欲の研究——エロティック・アジア』、平凡社、二〇一三年

上野千鶴子「解説」、小木新造・熊倉功夫・上野千鶴子校注『風俗 性』(日本近代思想大系二十三所

収)、岩波書店、一九九〇年

川村邦光「セクソロジー——明治の『造化機論』から戦後版『完全なる結婚』まで」『國文學——解

釈と教材の研究』第四十七卷九号、二〇〇二年七月

木本至『オナニーと日本人』、インタナル出版部、一九七六年

斉藤光「性科学・性教育編 解説」『性と生殖の人権問題資料集成 第二十七卷』（性科学・性教育編

1 一八七五〜一九〇五）、不二出版、二〇〇〇年

——編『近代日本のセクシュアリティ 第一巻 通俗性欲学以前』、ゆまに書房、二〇〇六年

坂本松梁編『日本楽府詳解 詠史詩集』、青山堂、一九一〇年

高西賢正『東本願寺上海開教六十年史』、東本願寺上海別院、一九三七年

武田雅哉『桃源郷の機械学』、作品社、一九九五年

土屋英明「中国の性愛文献 百六十三」『東方』三五七号、二〇一〇年十一月

深澤一幸「葉德輝の『双梅景闇叢書』をめぐる」『言語文化研究』第三十八号、二〇一二年三月

吉田寅「中国キリスト教初期医療伝道史研究——ホブソン著中国語医学書の一考察」『立正大学文学

部研究紀要』十二、一九九六年

劉建雲『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』、学術出版会、二〇〇五年

渡辺純成「満州語医学書『格体全録』について」『満族史研究』第四号、二〇〇五年六月

John B. de C. M. Saunders and Francis R. Lee. *The Manchu Anatomy and Its Historical Origin*.

Taipei: Li Ming Cultural Enterprise Co., 1981.

※本文中の漢文和訳は、特に注記がない限り、筆者による。

発表を終えて

十数年前、留学生として初めて日本に来た時の私は、将来、性の文化史という領域に足を踏み入れることになるとは思っていませんでした。指導教官の園田先生は温和な人柄で、好きなテーマで自由にやりなさい、とよくおっしゃってくださいました。お墨付きをいただいた私は、当時もっぱら日文研の図書室で異書秘本の類を漁り、読み耽っていました。また、コモンルームに集まってきた先生方の自由な放談にも興味津々で、よく耳を傾けたものです。今振り返ってみると、このような留学体験こそが自分の研究を方向づけたものにほかなりません。

今回のテーマは、日文研の共同研究会で着想を得てから、ここ数年間ずっと追いかけてきたものです。大勢の方々の前で報告できたことを、たいへん嬉しく思っています。院生の頃からずっとお世話になった井上章一先生は、今回コメンテーターを務めてくださいました。抑揚のある井上節に、陶然として聴き入り、質疑応答の時間はあっという間に過ぎてしまいました。同じ井上班のメンバーだった斉藤光さんと申昌浩さんは、当日わざわざ会場に足を運んでくださいました。お二方からは、多くの有益なご教示をいただきました。

発表にあたっては、佐野真由子先生ならびに研究協力課の皆さまにも、一方ならぬお世話になりました。今回の発表タイトルは、格好よくとても気に入っています。これは佐野先生とご相談した際、先生のアドバイスを受けて決めたものです。冊子の原稿ができた後、華東師範大学の同僚だった木村文三先生が、日本語のチェックを快く引き受けてくださいました。長々と書いてしまったので、字句や文法の訂正などでご苦勞をかけたに違いありません。

上記の皆様に、深甚の謝意を表します。

唐権